

前回（第2回）意見への対応について

資料 2

新大学のランドデザイン

	意見	岐阜市の考え
1	「学生に選ばれる大学」という表現が、「高校生に選ばれる大学」という意味かと思うが、どういう意図をもって「学生」にしてあるのか。【小野委員】	ご指摘を踏まえて入学者として最も多く想定する高校生を念頭に、生徒と併記することとした。学生の意図するところは、学びなおしを望む社会人なども含めた、大学入学を希望する入学生であり、新大学の学生が入学してよかったと感じられる大学を目指す意図も含め、学生の文言も併記している。
2	「学生に選ばれる大学」という言い方が、ここでは高校生に選ばれるという意味だろうと思う。リカレントは「市民に選ばれる」に入るとすると、「学生」は大学生以上、高校までは「生徒」と呼ぶことから、「学生に選ばれる」との言い方は疑問に思う。【斎尾委員】	
3	「学生」の考えについて、高校から大学に進学するという考えを変える必要がある。学びたい人たちという意味合いで捉えるならば「学生」になる。【吉田委員】	
4	「まちも、企業も、市役所さえも」の表現で、なぜ市役所に「さえも」としたのか。【斎尾委員】	当該箇所の記載を見直した。（資料4・9ページ）
5	こういう高校生に来ていただきたいというところはしっかりと、ここに記載がなくてもある程度特定しておいた方がいい。【河野委員】	昨年度実施した高校生アンケートでは、県外への進学を希望する理由として最も多かったのが「既に行きたい大学が決まっている」であったが、次いで多かったのが、特に愛知県への進学を希望している生徒において、「学びたい分野の大学が県内にない」というものであった。その結果も踏まえ、新大学では、県内の大学で比較的定員割合の少ない社会科学系と理工系学系の分野に絞り、従来、県外に進学していた入学生に新たな選択肢を提供することとしている。
6	8割の学生が県外に行く理由を調査し、理由ごとのアプローチを考える必要がある。【河野委員】	
7	我が国の高等教育政策として、多すぎる大学をどうやって減らすかということ、国を挙げて議論をしているときに、新しい大学を作るというからは、岐阜市には大学がまちの中心部に必要であって、その大学を中心として岐阜市のあらゆる行政課題についてしっかりと取り組むという市の政策が前に出たランドデザインを描かないといけない。【中田委員】	資料4・7ページにおいて、「岐阜市未来のまちづくり構想」と新大学基本計画との関係について記載を追加した。
8	良い街をつくるという市ならではの政策に踏み込んで大学のランドデザインを作る必要がある。【吉田委員】	
9	基本計画の冒頭の「基本計画の位置付け」に位置付けに関する文書がない。市の総合計画など各種計画と、新大学基本計画との関係や位置付けを明らかにすべし。【斎尾委員】	
10	産業界の立場で言えば、市の活性化、中小企業の活性化につながる大学であってほしい。【廣田委員】	"こどもファースト"を不変の方針に掲げる本市が、県内の高校生に新たな進学先を提供し、若い世代の県外流出を防ぐとともに、岐阜市に愛着を持って地域の企業や公共部門で中核的な活躍をする人材を育成し、地域経済の活性化を図ることを目的に、新大学を設置することには、大きな意義があると考えている。引き続き、新大学の必要性和設置意義を、市民や地元産業界などのステークホルダーに丁寧に説明し、対話を重ねながら、理解を求めていく。 資料4・29ページにおいて、岐阜市香蘭地区を新大学の候補地とし、施設に関する整備計画（仮称）を策定していく旨の記載を追加した。整備計画の策定過程において、新大学が地域の賑わいの核となるための方策を検討する。
11	立地は絶対に街中にしてほしい。企業連携、人手不足への対応さらには街中の空きスペースの対策にもつながっていくことを期待する【廣田委員】	
12	岐阜市近郊から通う従業員と名古屋市や愛知県から通う従業員では、後者の方が離職率が高いという事実がある。だからこそ、岐阜の地元にしかりとした大学があってほしい。【廣田委員】	
13	新大学の規模では運営費の不足分の負担を市民にお願いすることになることから、市民が納得できるような大学でなくてはならない。その一つが、若者を呼び込み地域活性化につなげるということであり、市民に選ばれる大学という点において重要な要素となる。【吉田委員】	
14	新大学は、行きたい、学びたいと思われる分野は何かを追求し、強い付加価値を作り上げてほしい。業界としても姉妹都市フレンツェとの連携を強化している。専門学校ポリモーダとの交流など、そういうところからも企業連携に結び付けてほしい。【廣田委員】	新大学は、県内の大学で比較的定員割合の少ない社会科学系と理工系学系の分野に絞ることで、地域に新たな学びの選択肢を提供するとともに、本市の姉妹都市との交流など、従来の岐女短の取り組みを生かした学部の特徴づくりを行っていく。

教育研究の内容	
意見	岐阜市の考え
15 大学全体としてどのような人材を育てるかが書かれていない。自立した多様な学生など、大学としての人材育成方針を示したうえで、それぞれの学部専門性を二階建てで示すことが必要。【杉山委員】	資料4・12ページにおいて、大学としての人材育成の目標や教育の特色について記載を追加した。
16 教育研究内容を示すに当たっては、「教育や学びの手法」「付けようとする力・専門性」「育てたい人材」の3点で記載すべき。また、2学部に通ずる部分があるならば、まずはそれを大学の学びのスタイルとして示したうえで、それぞれの学部専門性を織り込んでいかないと伝わらない。今の高校生は4年間でどのような力が身につくのかということに敏感になっている。【小野委員】	
17 自分の前職は企業だが、経営の基礎やリーダーシップを育てることが重要。分野のはやり廃りは気になるので、できるだけ基盤となる部分を鍛えることに重点を置きたい。【大田委員】	
18 社会共創学部で身に着けたい力が、マネジメント能力のみに見える。社会共創学部で身に着けたい力は、経営学やデータサイエンスの能力であり、そこに起業家精神や創造性が加わると考える。様々な形容詞を取り払い素直に表現すべき。【小野委員】	資料4・13ページにおいて、委員意見を踏まえつつ、新大学において考える教育研究の専門性及び軸、特色等について記載の見直しを行った。
19 アメリカなどではAIの発達によって、データサイエンスが凋落している。データサイエンスをツールとして使うのは重要なことだが、そこばかりを追及するのは、岐阜市がやることとして大丈夫かと思う。【吉田委員】	
20 生成AIが進むことで、デザイナーという職業がなくなるとまでは言わないが、最後に目利きをする情報力や先見性を持つ人材が本当に必要になる。【廣田委員】	
21 社会情勢がすぐ早く変わるということをどう捉えるか考えることが必要。今の通常の大学カリキュラムの考え方が、8年後の開校時や、最初の学生が卒業する12年後に続いているか分からない。【中田委員】	
22 新ビジネス創出等の教育内容も、現状の課題とマッチさせないと、結局外に出て働くことになってしまうので、岐阜市で働くキャリアパスが見えるようにするなど、輩出する人材像を示していくことが必要。【河野委員】	
23 どんな資質を輩出するかということになる。何の学士を出すのか、経営なのか情報なのかを考えなければならない。そのうえで学部の名称を考えることになる。【杉山委員】	高校生等がイメージしやすくなるよう、資料4・19ページにおいて、岐阜市の姉妹都市や岐女短の取り組みなどの具体的な事例を記載した。
24 岐阜市立の強みや都市全体をフィールドに学ぶという点について、企業との連携やグローバルなつながりの具体的なイメージが見えると、新大学の選択につながる。フレンチエとの交流など具体性を見せることも一案。【河野委員】	
25 教育研究の内容に分かりやすいイメージを入れるなど工夫が必要。【杉山委員】	
26 国際交流については、国際化と単に言うだけでなく、姉妹都市フレンチエなど例示があるとイメージしやすくなる。【杉山委員】	新大学において、デザイン思考は両学部に通ずるスキルと考えており、デザインの構想力を地域課題の解決につなげることを目指している。そのうえで、デザイン情報科学部はデジタル技術を用いたプロダクトデザインができる人材の育成を専門性の軸としている。基本計画決定後の正式名称の決定過程において、教育研究の専門性を的確に表す名称の在り方を慎重に検討する。
27 デザインという言葉が、見た目かスタイリングという意味ではなく、プロジェクトを動かしていく仕組みといった広い意味で使用していると思うが、そうであれば、社会共創学部にも該当するのではないかと。【斎尾委員】	
28 2つの学部には、どちらも起業家精神、デザインやクリエイションと呼ばれるような内容が含まれている。デザインは、誰が使うか、どう使われるかなど必ずターゲットがいる。社会共創学部も地域課題に対応できるようなアイデアを出しつつ、経営学の視点で解消していくという点では、デザインが入ってきている。【吉田委員】	
29 例えば、インターンシップやボランティアの窓口など、学生と社会をつなぐキャリアデザインのセンターが必要。【杉山委員】	地域企業への就職支援や、その強みを分かりやすくメッセージとして伝える必要性について、委員と認識を共有している。 資料4・19ページにおいて、「産学官連携センター」を「産官学連携・キャリアデザインセンター」へと名称を改めるとともに、社会と学生のつながりを支援する機能を有することを明記した。
30 大学運営に学生が参加することは、教育の観点からも重要な視点。【杉山委員】	学生による大学運営への参画が重要であることは、委員と認識を共有しており、市大学の魅力の一つと考えている（資料4・23ページ）。他大学での取り組みも参考に学生参加の仕組みを導入する。

キャンパス・立地、費用

	意見	岐阜市の考え
31	基本計画の「都市全体をキャンパスにする」というコンセプトは非常に評価する。それをどう体现するかについては、様々な案がある中で、どのように決めていくかは重要なことであり、市立大学であるので、市のまちづくりと一緒に決定していくべき。【斎尾委員】	資料4・7ページにおいて、「岐阜市未来のまちづくり構想」と新大学基本計画との関係について記載を追加した。
32	市の市街地開発に大学が必要というブレない方針があるなら、そこに即して論を展開していけば、今後時代の流れで学部の内容が違ったとなっても、柔軟にできるのではないか。【中田委員】	
33	新規にキャンパスを整備する場合は、しっかりと時間をかけて、新大学の学習プログラムに沿った魅力的な空間を設計すべき。【斎尾委員】	新大学は、「都市全体をキャンパスとする」理念とし、学生が自然とまちに出て、まちをフィールドとして学ぶアクティブラーニングの実現を目指している。 このような理念の具現化を図りつつ、図書館機能や教育研究・交流の拠点となる場として、市中心部の岐阜市香蘭地区を候補地としてメインキャンパスを整備することとしている。基本計画決定後も、施設に関する整備計画（仮称）の策定過程において、有識者のご知見を伺いながら、新大学の教育研究に則した魅力的なキャンパス整備を進める。
34	ウェブ動画などもある中で、なぜ大学での授業が必要か学生と議論したことがあるが、やはり仲間と議論し、意見を聴き、失敗もしながら試行することが重要であり、そうした経験を積むことができる大学であるとのメッセージを見せられればよい。【河野委員】	
35	市民の支援が得られるのであれば、メインキャンパスがあつて、2つの学部がそれぞれまちの中に入り込んでいても構わないと思う。【斎尾委員】	
36	今回の修正で「メインキャンパス」という言葉が入ったのは良かった。パッチャルの時代だからこそ人のつながりを大事にしている高校生は、分散型のキャンパスを嫌う。駅の近くに大きなキャンパスがあることが一番よく、そこを基地にして柳ヶ瀬など外に出ていけばよい。【小野委員】	
37	高校生主体の目線ではワンキャンパスが求められるが、他大学も同じなので、そこから差別化を図る方向性もあり得るのではないか。【吉田委員】	
38	今の時代の流れとして、駅前に大学が戻ってきている状況にある。バスで20分という現在地は距離感があり、中心部に整備する計画は妥当性がある。新規に学生を集める観点からも新キャンパスを整備することも必要と思う。【太田委員】	
39	中心部に移転する場合、今の岐女短のキャンパスをどうするかも一体の課題であり、費用としては元のキャンパスへの対応分も含めて市民に示されるべきではないか。【斎尾委員】	新大学を市中心部に整備する場合、現岐女短施設の後利用は一体で検討していく必要があることは、委員と認識を共有している。 現時点で、具体的な利用方法の候補を選定するまでには至っていないが、新大学、あるいは新大学を設置する法人による関わり方なども踏まえながら、検討を行っていくことが適切であり、市民への説明も必要であると考えている。
40	8年後の開学がキャンパス整備に由来するものであれば、例えば、4年後くらいに開学し、現在の岐女短の施設で繋ぎながら、さらに4年後のまちなかの新キャンパス整備を進めるという道筋は考えられないか。【中田委員】	全国的に短期大学への進学率が低下する中、岐女短の志願者数は令和元年度（2019年度）から大きく減少しており、令和2年度（2020年度）以降は入学定員を充足できていない状況が継続している。こうした状況や今後の18歳人口の急速な減少予測に鑑み、施設整備の在り方も含めた早期開学の可能性について研究していく。